

「命・仁さがしの旅」プロジェクト～自然や人とのかかわりの中で～
【総合的な学習の時間（5年生）全45時間】

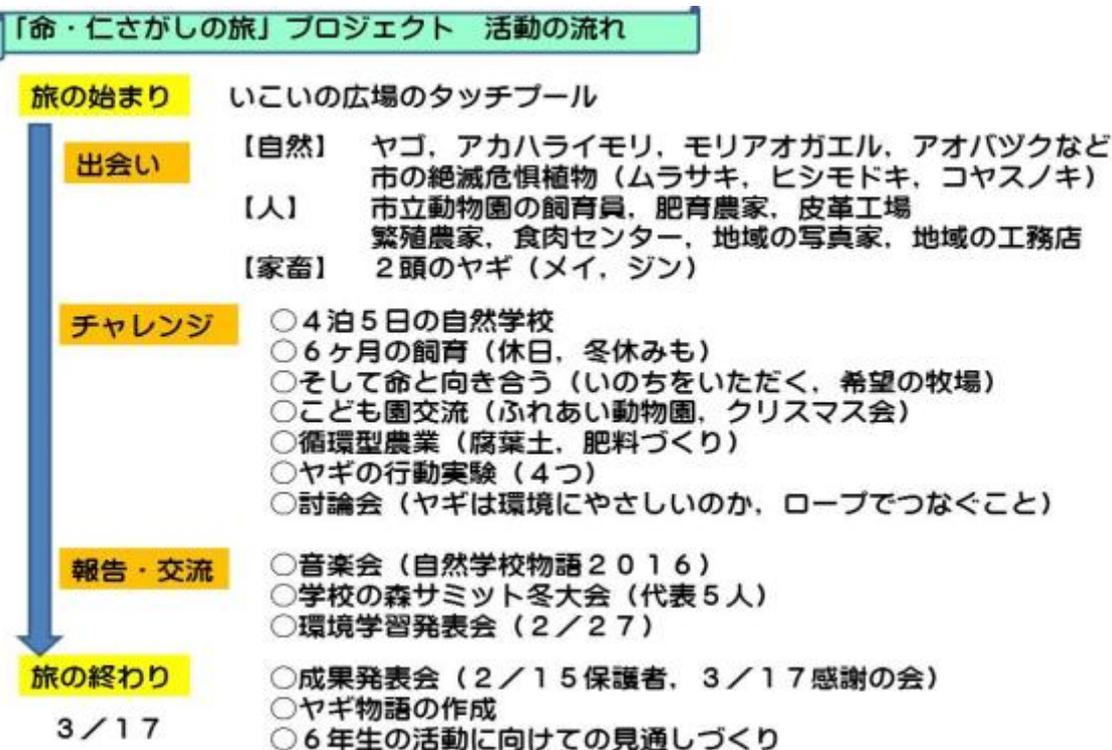
(1) 学習の目的

「命」とは、動植物の命、「仁」とは、そこに関わる専門家（名人）の優しさや思いやりを意味している。4月より、子どもたちが「命・仁さがしの旅」に出かけ、その過程で、自然への親しみ、神秘性、そして命の重みなどを実感し、その学びを自分自身の生き方に活かそうとする。

(2) 子どもたちに身に付けさせたい力

- 【知識，技能】観察する力（理科との関連），社会認識（社会科との関連）
- 【思考，判断，表現】探究する力，伝え合う力
- 【学びに向かう力，人間性】主体性，協力する力，命の尊さを感じる心

(3) 「命・仁さがしの旅」の行程表



(4) 「命・仁さがしの旅」のダイジェスト

①きっかけ



写真 1

新宮小学校には、約40年前に植樹された木々が育ち、みつわの森をつくっている。昨年の6年生が、そこにある草木ゴミの一時保管場所を「いこいの広場」へと整備した。

「命・仁さがしの旅」は、このいこいの広場が舞台である。4月、写真1のように、タッチプールでギンヤンマの羽化に遭遇した子どもたち。それがきっかけとなり、動植物の命について研究したいという思いを強くした。

【新宮小の環境学習のつながり】



資料 2

新宮小学校では、資料2のように、6年間の環境学習を行っている。5年生の子どもたちは、3年生で「しんぐう自ぜん研究所」をつくり、アゲハチョウやカイコ、揖保川のアユなどについて、調査研究している経験があり、そのため、動植物の命について深く学びたいという思いにつながったのであろう。

また昨年より、この広場では、市の絶滅危惧植物である「ムラサキ」や「ヒシモドキ」を保護している。特に自生が難しいといわれていた「ムラサキ」が、開花したことも影響していると思われる。

②アカハライモリ、カスミサンショウウオ、モリアオガエルなど生き物との出会い



写真 2

写真2にあるように、子どもたちは、いこいの広場に行くと、様々な生き物の産卵の様子に出会えた。この体験が、子どもたちに新たな気付きを生んだ。例えばアカハライモリ。卵を持っていると知ると、複数つかまえては、腹の色を確認するようになり、模様の違い



写真 3

や色の違いに関心をもち始めた。絶えず図書館（学校より徒歩2分）に行き、図鑑と見比べながら、探究する子どもたち。その発展として、泉に写真3のような飼育BOXを設置

し、継続観察できるように工夫する子どもでできた。また、偶然ではあるが、アカハライモリの赤ちゃんをつかまえたと思った子どもが、しっぽのつくりの違いに気付いたことがきっかけで、この泉には、カスミサンショウウオが生息することも理解できた。

モリアオガエルについても、泡の役割について、「カイコの繭と同じ」という視点から、外敵から守る役割だと気付いた。3年生でのカイコの飼育体験が生きた気付きである。

③ヤギの飼育への挑戦



写真 4

なぜヤギだったのか。きっかけは、いこいの広場にシンボルとなる生き物を飼いたいとの提案だった。まず、生き物についての条件を決めた。そして、「世話をすればなつくこと」、「飼育に安全であること」、そして「広場に役立つこと」といった3つ条件をクリアしたのが、ヤギだったのである。

ここから、子どもたちの挑戦は始まった。いこいの広場でヤギを飼育するためには、校長先生の許可をとる必要があることを伝え、写真4に示すプレゼン

ンに向けた準備に取りかかった。参考となる資料を図書館から借りたり、県内の牧場に手紙を書いたりしながら、40人が8つのグループに分かれ、えさや病気、小屋作りの費用等について調べたのである。プレゼンの結果は「No」。校長先生の許可は得ることができなかった。あきらめきれない子どもたちは、実際にヤギを飼育する人から情報を得ないと説得力のある説明ができないと判断し、動物園での調査を考えたのである。写真5のように姫路市立動物園に出かけ、飼育員さんから飼育のポイントや愛情いっぱい関わることの大切さを学んだ子どもたちは、発表内容を練り上げ、再度、校長先生にプレゼンした結果、合格をいただいた。企画から2ヶ月目のことだった。



写真 5

④観察力の向上

ヤギ小屋、えさ、獣医さんなど飼育に関わる準備が整い、市教委からの許可も出た10月、姫路市立動物園から2頭のヤギがやってきた。3月までの6ヶ月レンタルである。実現に喜ぶ子どもたち。休憩時間になると、みんな自然とヤギ小屋に集まった。生後7ヶ月

実験1 ヤギは、えさを、見て判断するか、においで判断するか

予想：ヤギは、「においで判断する」も、「見て判断する」の意見もあった。
 実験方法：比較実験をする。（ネットとケースで）

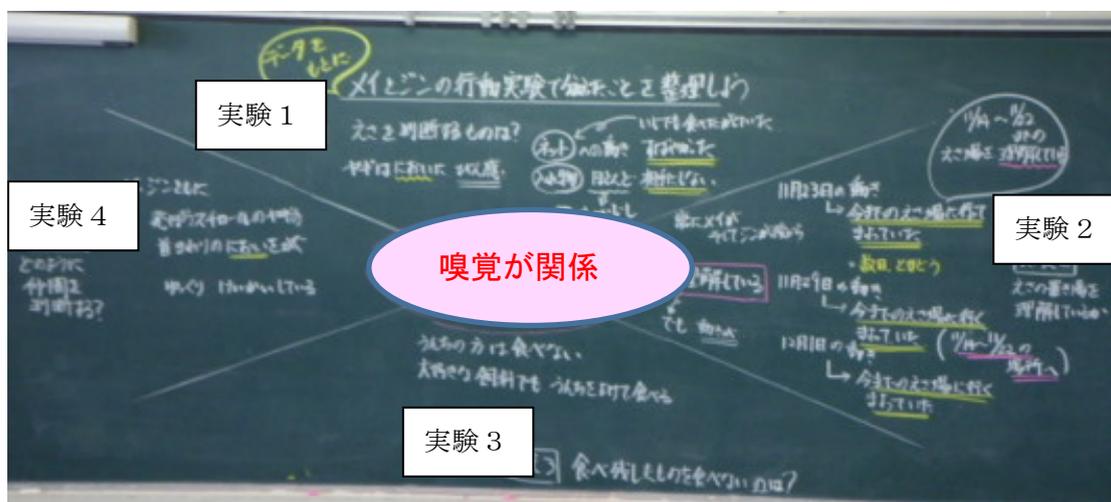


資料3

- 【実験1】ヤギは、えさを見て判断するか、においで判断するか
- 【実験2】ヤギは、えさ置き場を理解しているか
- 【実験3】ヤギは、なぜ食べ残したえさを食べないのか
- 【実験4】ヤギは、どのようにして仲間だと判断するのか

目の2頭のオスヤギの名前はもちろん「メイ」と「ジン」である。

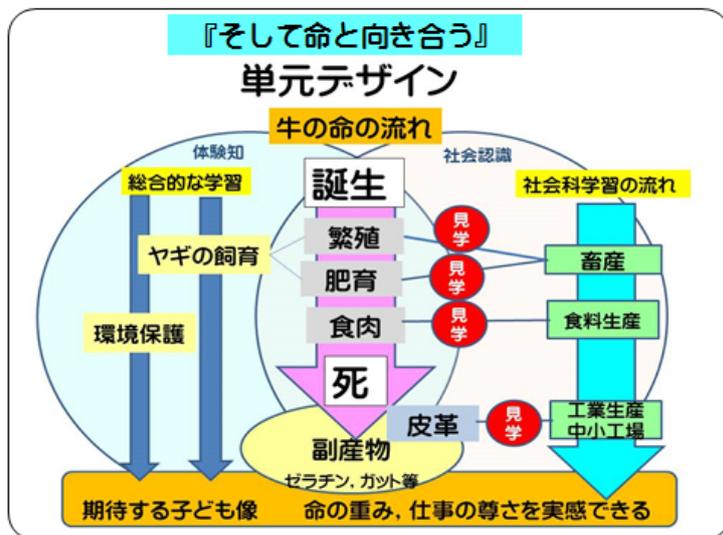
転機は飼育に慣れ始めた10月末だった。図書館でヤギの行動実験に関する本を見つけた子がいた。そしてみんなに「単に飼育するだけより、行動実験がしたい」と提案したのである。そこで本も参考にしながら、資料3のように次の4つの実験に取り組んだ。



資料4

4つの実験を写真とビデオで記録し、資料4のように、黒板にYチャートを描き、整理した結果、嗅覚がポイントになることが明らかになった。このように気づきや疑問を出し合い、その都度、整理・分析する機会を持つことで、観察力は向上し、その成果が、日々の書きためた個別の気づきシートにも表れた。

⑤社会認識を養うために



資料 5

ヤギの飼育での体験知と社会科の学習内容と関連させることで、子どもたちの社会認識を養おうとした。資料5は、人権領域で行った「そして命と向き合う」の単元デザインである。市の地場産業「皮革」を羊の命のつながりで捉え、命の重みや仕事の尊さを実感させることを目的とした学習である。資料5に示す通り、5年生の社会科の学習内容である畜産や食料生産、中小工場の働きなどは、

羊の命の流れに示した繁殖農家から皮革の生産までの流れとよく当てはまっていることが分かる。社会科の授業では、日本における畜産や食料生産の工夫や課題について学習しつつ、同時に総合的な学習の時間における人との関わり（繁殖農家、肥育農家、食肉センターで働く方々、皮革工場の職人）で知り得たことを関連させることで、トレーサビリティやBSE検査の必要性など、具体的な食の安全に関する事項を深く理解できていた。

また特に知ってほしい食肉センターで働く職人さんの思いについては、絵本「いのちをいただく」を利用した。2つのテーマ「命の重み」、「仕事の尊さ」について意見交流会を持ったのであるが、子どもの「みいちゃん（肉牛）の涙はよく分かる」や「お肉になる牛も心ある職人さんに解いてもらいたいと思っているはず」などの発言に、ヤギの飼育体験と重ね合わせた意見が多く見られ、飼育での体験知が表れていることが分かった。

さらに社会科の公害の学習後に、東日本大震災での原発事故による牧場主の生き方にふれた絵本「希望の牧場」を利用したり、世界遺産の学習後に小笠原諸島の野ヤギ被害を考えたりした。社会科での学習と飼育体験があるからこそ、自分なりに根拠に基づいた発言ができ、命の尊さ、家畜の立場、責任を持って飼育することについて考えられたのである。

⑥学校の森サミット冬大会の役割

1月末、代表の5人が学校の森サミット冬大会に参加した。この大会での交流が子どもたちに、次の活動へのヒントを与える機会になった。影響を受けたのは高知県香美市の中学生の活動である。育てた作物を名産品に変え、地域おこしに役立てるというものである。ヤギのフンや敷き藁を循環型農業に利用したいと漠然と考えて



写真 6

いた子どもたちにとって、具体的な道しるべとなった。

交流会後、早速、提案を画用紙1枚にまとめ、みんなにポスターセッションをした代表の子どもたち（写真6）。提案の結果、6年生では、現在土づくりをしている土地で野菜を育て、地域の方との交流に活かすことが共有された。

⑦アウトプットの機会



写真7

「命・仁さがしの旅」で学んだことをアウトプットする機会として、聞き手を変えつつ3回の発表の機会を持った。写真7は保護者対象とした1回目の発表である。国語のスピーチ単元でのスキルを活かしつつ、タブレットを使ったポスターセッションとした。

2回目の発表は、本校で行った環境教育学習発表会である。3年生以上の学年が1年間の環境教育の活動を発表した。聞き手は地域の方や環境教育の専門家のみなさん約100名である。3回目は、動物園の飼育員さんや地域の工務店など、この活動でお世話になった方を招待した感謝の会として行う。（3/17予定）。

対象を決め、アウトプットする機会は、活動での学びを再構成できる機会である。このように聞き手と発表内容を変えることで、今までの活動を多面的に捉え、活動の分析ができるようになると思う。

（5）「命・仁さがしの旅」の成果

旅の終わりが近づいた3月、企画した活動がほぼ終え、感謝の会というアウトプットの機会を残すのみとなった。そこで、1年間の活動をふり返ったパフォーマンス評価を行った。まず個別に思考ツール（同心円）を使って、事実に基づいた一人一人のふり返りを行った。そして、それをもとに、クラス全体で身に付いた力を分析した結果、次の5つに整理できた。

- 責任感、協力、愛情（事実：休日や冬休みもヤギの飼育を続けることができた）
- 命と向き合うこと（事実：動植物の誕生と出会ったり、命について議論したりした）
- 観察力（ヤギの行動観察や動植物のつくりや変化について調査できた）
- 自然や生物への関心（自然の中にある不思議なことや知らなかったことに出会えた）
- 説得力のある伝え方（事実を具体的に示し、相手の立場を考えて話すことができた）

これらは、学習活動を企画した時に予想した身に付けさせたい力と合致することが多く、改めて、効果的な体験活動と学び合いの時間が重要であることを認識できた。

自然体験や人との関わりは、子どもたちを大きく成長させるきっかけとなる。今後ともこれらを大切に授業づくりに取り組んでいきたいと思う。